「漸進」を選択したロシア軍の攻勢

――依然として遠い停戦の前提

拓殖大学非常勤講師
伊藤嘉彦
いとう　よしひこ　大東文化大学及び独イェーナ大学博士前期課程卒。拓殖大学大学院国際協力学研究科博士課程修了。博士（安全保障）。

二月二四日にロシア軍によるウクライナ侵攻が開始され、すでに四ヵ月半が経つ。本誌七二、七三号では、ロシア軍のウクライナ侵攻開始から五月中旬までの情勢を分析してきた。ロシア軍は東部での攻勢でウクライナ・ドンバス地方の確保という目標へ向けて漸進する一方、ウクライナ軍は南部地域奪還を目指している。本稿では、引き続きウクライナの戦況を概観するとともに、ロシア軍漸進の要因を考えてみる。

東部での激戦は続く

六月以降のウクライナでの戦況は、侵攻開始直後の二月下旬から四月にかけて見られた、首都キーウから東部に再配置というような、ロシア軍の大規模な攻勢発起点の変更を伴う再配置ではなく、ウクライナ東部二州を掌握しようとする「作戦第二段階」を継続した範囲での攻防が続いた。

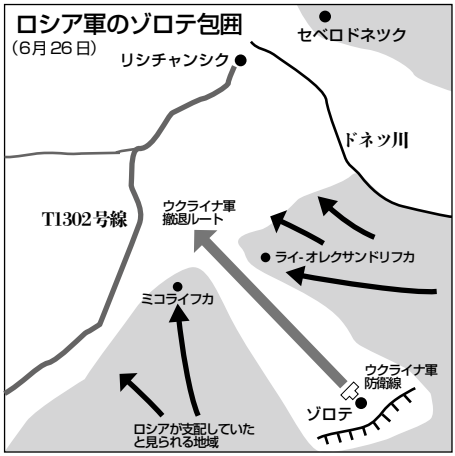
ドンバス地方では、ルハンシク州の町セベロドネツクをめぐる攻防が長く続いていたが、ロシア軍は六月二六日にここを掌握。その後、ドネツ川を挟んで隣接するリシチャンシクでも戦闘が発生したが、ロシア軍が町の大部分を占拠して、ウクライナ軍はリシチャンシクから撤退。ここにロシア軍はルハンシク州の大部分を掌握することとなった。ルハンシク州のハイダイ知事は七月四日、ウクライナ軍のリシチャンシクからの撤退は「第二のマリウポリになりかねなかった」としてやむを得ないと表明する一方、ロシアのプーチン大統領はウクライナでの攻撃継続を指示しており、今後のロシア軍はドネツク州の要地掌握を計画し、これに伴った戦闘が発生する可能性が高い。ウクライナ軍が東部に設ける防衛線が、ロシア軍の攻撃を抑える程度によって、ドネツク州の戦況は変わってくるだろう。

ロシア軍漸進戦術の妙

ウクライナ内務省のアンドルシフ顧問は五月中旬の段階

で、ロシア軍によるウクライナ東部地域の掌握を目指す「作戦第二段階」は失敗し、ロシア軍はウクライナ占領地の現状維持を目的とした防衛線を構築して長期戦に備える「作戦第三段階」に入ったと分析したが、この分析は必ずしもその後の戦況には当てはまらず、東部のロシア軍は六月に入っても時間をかけながら少しずつ占領地を拡大していた。

ロシア軍の戦術は開戦当初の機動力を活かした主要都市の占領とは異なっており、現状で多用している戦術の特徴は、東部要衝への圧倒的な砲撃後の直接攻撃と、守備するウクライナ軍の補給線分断を企図しながら要衝のウクライナ軍を包囲しようとする間接的な攻勢の組み合わせである。東部のロシア軍はウクライナ軍を包囲殲滅しようとする状況にして、ウクライナ軍に戦線縮小（つまり、ウクライナ軍の前線を下げる行動）を強いる機動を行っている。



その成功例の一つは六月下旬にルハンシク州リシチャンシク南方ゾロテでの戦闘である。ウクライナ軍はゾロテの町に六月二三日ごろまで防衛線を形成し、リシチャンシク南方に位置してロシア軍の攻撃を撃退していたが、ロシア軍はこの防衛線を迂回し東方からライ-オレクサンドリフカに進出し、他の部隊はポパスナから北進してミコライフカへ進出した。その結果、ゾロテ周辺に展開するウクライナ軍部隊は突出部を形成することとなり包囲されるおそれが出てきたため、ゾロテ突出部のウクライナ軍部隊は包囲殲滅を避けるため、二六日ごろにはこの突出部を放棄し、後退して戦線を縮小した。また、ロシア軍はリシチャンシクへの補給線として有用な道路の一つであるT一三〇二号線を遮断すべく、ベレストベの町周辺へ進出を試みていた。大きく俯瞰すれば、六月下旬のウクライナ東部においてはリシチャンシクがウクライナ軍の東部突出部の頂点を形成しており、ロシア軍はベレストベ付近からリシチャンシクに対する補給を断ちつつ包囲環の形成を試みたかもしれない。この場合ロシア軍は、北方のリマン付近からも南東に

進出してウクライナ軍の東部突出部を大きく包囲する動きがシヴェルシクで成功すれば、戦術として成り立った可能性もあるが、ロシア軍はヤムピリ付近からドネツ川を渡らねばならず、ウクライナ軍がこれを阻んだほか、ウクライナ軍はベレストベ周辺でロシア軍のT一三〇二号線の遮断を許さなかった（六月二一日）。リシチャンシクから北方はドネツ川を挟んで両軍が対峙する形となっており、すでに川を渡って河川の干渉が少ない南方のロシア軍とドネツ川を渡らねばならない北部リマン方面のロシア軍との連携は困難があったので、ロシア軍はこの包囲環を実現できなかったと思われる。しかし、ロシア軍はより小さい包囲環の形成を試み、ゾロテ方面を確保した部隊がリシチャンシク南方から同市を包囲しようと機動し、六月二九日ごろにウクライナ軍によるT一三〇二号線の維持は困難となった。ウクライナ軍はリシチャンシクの確保に固執するよりも、兵力の温存を計った方が得策と判断したように思われ、リシチャンシクを放棄し、戦線を縮小した。

後退するウクライナ軍側から見た場合、六月中旬までのセベロドネツクのように、突出部最前線ではロシア軍に出血を強いる一方、後方にある重要拠点は確保し、包囲を試みるロシア軍の間接的な迂回攻撃を成功させないように対処することが要求される。しかし、東部地域では、迂回して包囲しようとするロシア軍の機動に、ウクライナ軍が対抗することは難しい状況だったことが見て取れる。一連の迂回攻撃を撃退し、包囲を容易に達成させない状況ができた時に、ウクライナ軍の東方地域における反撃は机上に載る。七月一三日現在、ウクライナ軍はロシア軍補給線基地に長距離砲撃を行うことで戦果を挙げていると見られるが、ウクライナ軍による補給基地攻撃がロシア軍の進撃遅滞に与える影響を見極めるには、もう少し時間が必要と思われる。

西側諸国による武器援助の影響

ここ一ヵ月ほどで、西側諸国による武器供与が進捗している。ポーランドのモラビエツキ首相は二〇〇両近くのT-72戦車を供与できる体制を整えると述べた。また七月一二日、スペイン政府は一〇両のドイツ製戦車レオパルド2と二〇両の米国製装甲兵員輸送車M113の供与準備に入っていると報じられている。他方、遠距離攻撃を行う榴弾砲、ロケット砲は「西側の支援」が行われているが、まだ数が少ないように思われる。すでにドイツ製自走榴弾砲PzH2000と米国製高機動ロケット砲システム「HI

ＭＡＲＳ」の実戦配備が明らかとなっており、支援によって得られた遠距離攻撃兵器によって戦況が変化するかも知れない。しかし、ＰｚＨ２０００の配備に関しては、ドイツからの供与が七両、さらにオランダからは五両であり、計一二両程度となっている。ＨＩＭＡＲＳについては、これまでウクライナ軍が有していた榴弾砲よりも長い射程を有しているとされ、ロシア軍の兵站線に打撃を与えるなど攻撃の選択肢が増えたが、供与された数が六月二三日の段階で四基とされており、「七月八日に四基の追加供与を決定」とメディアが伝えている。

今後のさらなる引き渡しについては不明とされるが、遠距離攻撃に従事する兵器の質はともかく、砲門の数ではまだロシア軍に比肩していないと思われ、運用方法が問われる。米国は同日、四億五〇〇〇万ドルのウクライナ支援を表明しており、追加の武器供与が行われる可能性もあるが、それも兵器が一定数揃わないと、ウクライナ政府が考える占領地の奪還はきわめて限定的な結果になる可能性がある。ウクライナ政府の考えは、西側供与の兵器が揃う六月中旬に反撃を行う、ということだったが、ロシア軍の漸進と、それに対応するためのウクライナ軍の兵力転出、兵器の絶対数の少なさが、ウクライナ軍による反撃の足枷になる可能性がある。

戦争終結の出口は見つかるか

ウクライナのゼレンスキー大統領は、六月二七日にドイツで開催された主要七ヵ国首脳会議（Ｇ７）にオンラインで参加し、「冬までに戦争を終わらせたい」と発言した。一方でその数日前に、彼は「ウクライナ南部を取り戻す」と表明しているほか、「ロシアに奪われたすべての都市を取り戻す」とも発言している。戦線が膠着しつつあるものの、東部では少しずつロシア軍に占領地域を拡げられている現状で、これらの目標が矛盾なく成立するのは、今のところ難しい情勢に見える。

他方で、ロシア側はショイグ国防相が五月二四日の段階で、「目標を達成するまで特別軍事作戦を継続する」と述べている。その目標が東部二州の確保にあると仮定した場合、ロシア軍はドネツク州の完全掌握までに相当な戦闘を強いられる可能性があり、近日中に「目標達成」に向けた体裁が整うかは微妙なところである。

ウクライナ、ロシアともに、講和に持ち込む条件を満たしていないと考えられる現在、この戦争はもうしばらく続くことになると思われる。●